

## 書 評

梅屋潔、シンジルト編

『新版 文化人類学のレッスン——フィールドからの出発』

東京、学陽書房、2017年  
295頁、2,000円（+税）

川口 幸大\*

よい教科書とはどのようなものだろうか。もちろん教科書と一概に言っても、それが初等教育で使われるものなのか、あるいは大学、それも全学部対象の教養科目向けのものか、専攻学生のテキストとして読まれるものかによって、その答えは違ってくるだろう。編者の「はしがき」によれば、本書は二番目、つまり「大学に入学したばかりの、具体的には、学部一般教養の「文化人類学」の講義を受講する初学者を想定して編集されている」(p. v) とのことである。ただ、対象をこう限定したとしても、上掲の問いに答えを出すのは必ずしも容易ではない。すなわち、①ひたすら分かりやすく懇切丁寧に書かれ、読んだ者の頭にすっと入る(気になる)もの。これをよい教科書とする向きもあるだろう。かく言う私自身が最近教科書を書いた際には、対象を高校生からと想定したこともあるが、とにかく分かりやすさを一番に心がけた [川口 2017] (なお、私は以下に幾度か言及する『東アジアで学ぶ文化人類学』[上水流他(編) 2017] には編者の一人として関わり、こちらは学部学生を主な対象としている)。一方で、過保護はよろしくないであり、②文章が多少とも生硬あるいは難解だったり、記述内容には著者の持論に偏った箇所などがあつたりしても、教師の導きを手がかりに学生自身が苦勞してそれを読み解いてゆくべき性質の書。こうした本来の(!?) 大学での学びたるプロセスを要する教科書こそよい教科書であるという考えもあるだろうか。さらに、授業は教師と学生との二者関係によって成り立っているため、どちら側に立つかでよい教科書の評価も変わってくるかもしれない。学生の側からは①がよい教科書だという声が聞こえてきそうだが、では教師にとってはどうであろうか。あるいは、双方にとってよい教科書があるとするれば、それはどんなものなのだろう。

\*東北大学 email: yukihirokawaguchi@hotmail.com

上述の通り私自身が文化人類学の教科書を最近出版したこともあって、本評は以上のような問いを念頭に置きつつ執筆した。また、授業同様、教科書も研究者である教師だけでなく、学ぶ主体たる学生あってこそその企図が果たされるべき類いの書であると考えて、本書を実際に授業のテキストとして使用した上でこの書評を執筆した。具体的に言うと、私は東北大学文学部において文化人類学専攻に進んだばかりの学部2年生を対象とした「文化人類学基礎演習」の授業を担当しており、メインの教科書としては自身が編集に関わった『東アジアで学ぶ文化人類学』[上水流他(編) 2017] を用いつつ、サブ教材として本書を使った。本評はその授業における経験と学生の声を加味してしたためている(ただし本稿の執筆時期が6月末であったため、本書の約4分の1は授業では未使用だということをお断しておく)。

さて、中身に目を向けよう。構成としては順に、「L1 文化と未来」、「L2 フィールドワークと文化人類学」、「L3 動物と人間」、「L4 環境と生活」、「L5 セクシュアリティとジェンダー」、「L6 家族と親族」、「L7 民族と国家」、「L8 儀礼と分類」、「L9 宗教と呪術」、「L10 交換と経済」、「L11 グローバル・イシューと周辺社会」となっている。これらの項目の大半は、最近相次いで出版されている他の教科書 [桑山、綾部(編) 2018] とともに、私が執筆・編集したもの [川口 2017; 上水流他(編) 2017] ともおおむね共通、または部分的に重なっている。文化人類学という限定された専門分野の教科書であるから当然と言えば当然かもしれないが、この学問を専攻する編者と執筆者の間で学んでほしいと考える主題についてのコンセンサスが大枠では得られているということだろう。とりわけ、「人類学は社会の「役に立つ」か?」とサブタイトルに題された最終章のL11において、文化人類学の学びが学生たちにいかなる意味と意義を持つかが論じられている点も私(たち)が書いた教科書と相通じており、この問いが同世代の人類学者たちの間で問題意識として共有されているということも分かった。

一方、本書の構成の特徴としては、L3とL4に明らかかなように、動物と環境を扱っている点が挙げられる。これらはいずれも2005年に出版された本書の元版 [奥野、花淵(編) 2005] には含まれておらず、2011年の増補版 [奥野、花淵(編) 2011] では本書の「動物と人間」に相当する「霊長類と文化」が、そして今回の新版で「環境と生活」がそれぞれ新たに収録されている。広く自然や生態といった側面に編者たちの関心が向かってきていることがうかがえる。実際に本書の冒頭では、「人新世 (anthropocene)」においてフィリッ

プ・デスコラ、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド・コーンらが牽引する、いわゆる「人類学の静かなる革命」が執筆者たちの新しい問題意識であることが述べられている (pp.18-20)。

ひとまずここで、私自身がこの「人間的なるものを超えた人類学」に未参与ではあるものの大いに関心を持っていることを断った上で、気になった点を指摘しておきたい。すなわち、L4の中の「(人間の) 歴史は進化という視点で捉えられるはず」(p.79)、「人間は本質的には狩猟採集民」(p.90) という表現、およびそこに顕在する通りの、この章で貫かれた環境決定主義的なスタンスについてである。私の認識が他の人類学者たちと大きくズレているのでなければ、私たちがこの教科書の読者と想定される学部学生に伝えたいと思って講義しているのは、明らかな価値や序列を含意した「進化」といった概念を問い直していくことであり(それが新進化主義で言う意味での「進化」であっても、3.11後の今日ではなおさら)、本質的にというよりは、かつては狩猟採集民であった人間が今日いかにそのみには生きていないかということではないか(男性=狩り→仕事という図式のときほぐし等)。あるいは、仮にこれらが私個人の見解に過ぎないかもしれないことを差し引いても、上掲の記述は新たな人類学が持ちうるロマンを通り越して、私たちがこの学問に想定する知見とはかなりかけ離れており、少なくとも初学者には誤解を生みかねないと思われる。間違っても人類学を画一化する必要はないし、個々の理論についての多様な見解があってしかるべきだが、さすがにここは授業で使うなら相当の注釈というか補足を要するだろうし、学生自らが読み解いてゆくべきものとしてよい教科書を定義したとしても、その内には収まり切らないというのが率直なところだ。

次に各章の中身に入ろう。いずれの章にも疑問文のサブタイトルが付され、冒頭で読者に問いかける形で主題が提起されている。例えば、「L6 家族と親族」なら、「親と子は血のつながっているものか?」というサブタイトルに続き、「家族とはあなたにとってなんですか。そう質問されるとどう答えるだろうか」(p.131) という具合だ。このやり方は私(たち)の教科書でも採用しており、おそらく本書においても同じく、文化人類学で扱われている問題を学生自身に身近な話題として考えてもらいたいという編者たちの意図が働いているものと推測される。大学に入って間もない学生を主体的な学びに誘うための効果的な導入のあり方だと思う。

構成としては続いて、各主題について人類学の知見と学説史に沿って概説が記された後、それに関わる執

筆者のフィールドの事例を通して具体的な説明がなされ、最後にもう一度身近な話題に戻ってまとめがなされるという流れになっている。いずれの章においてもこの展開はほぼ統一されており、編者を通して編集方針が徹底された様子がかがられる。編著はともすれば章ごとにコンセプトの捉え方や構成にばらつきが大きく、統一感のないものが散見されるが、その点で本書は前述のL4を除いては、一冊の書物として完成されていると言ってよいだろう。編者を中心とした執筆者間のチームワークのよさを評価したい。ただ、学説史や理論の説明は、私を含め人類学を専門として久しい教師の側はおおむね理解できると思うが、もう一方の読者である学生にはかなり難しいと感じる箇所が少なくなかったようだ。例えば、象徴体系としての宗教について、「一見して目的や機能が明らかでないような宗教的实践は、象徴的であるとされ、文化的テキストとして、その隠された意味やメッセージを解説すべき対象とみなされた」(p.223) という解説は、なるほど人類学を一通り学んだ者はその通りだと思わされようが、初学者には読み取るのは困難だろうし、実際にそういう声が大半だった。私の経験から言っても、自分自身の専門分野であれ、理論や学説史を手短に分かりやすくまとめるのは至難の業だ。学生自らがテキストをもとに自己探求してくれるのが理想だが、人類学を専門としない他学部生になら、そこまで求めるのは酷かもしれない。いずれにせよ、教師による補足説明が要されるだろう。

本書の最大の特徴は、「フィールドからの出発」と銘打たれたサブタイトルが示す通り、執筆者自らのフィールドの事例に、少ない章でも3ページ(L6)、多い章では9ページ(L5)と、ふんだんに紙幅が割かれている点である。授業で同時に読んだ『東アジアで学ぶ文化人類学』[上水流他(編)2017]と比した読後の印象としてもそう感じた。ここからは、執筆者たちが長く関わってきたフィールドの微細な事例から主題を論じていこうという意図がかがえた。少なくとも現在までのところ、個別具体的なフィールドに立脚して議論を展開することが人類学の最大公約数であるのは疑いないのだから、この方針自体は多くの共感を得られるところだと思われる。しかし、正直なところを記すと、学生たちからは「事例を読むのがしんどかった」という声が少なからず聞かれた。その理由をたずねると、「出てくる〇〇人についてイメージがわからないし、場所もよく分からないから」という答えが返ってきた。人類学を学ぶ者としてはショッキングな意見に思われるかもしれないが、実はこれは私自身も本書を含め人類学者による著作を読む際にまま感じる

ことでもあり、さらに自分が学生の時に受けた授業においても感じていたことだったので、意外にも共感を得られた気がしたのが実際のところであった。私と学生の貧弱な想像力と人類学的な素養のなさに大きな原因があることを差し引いた上でこれについて考えてみると、当該の地域や人々（民族）についてほとんど何も知らずに読んだ場合（おそらく多くの読者にとって国（地域）だけで言っても、L7の中国とL10のスペインを除く大半がそうであろう）、具体的な事例がどうもうまく飲み込めないのではないだろうか。つまり、そこで論じられているジェンダーや儀礼の位置づけは、当該社会についてのある程度のホーリスティックな知識や、大まかなものであっても何らかのイメージなしには理解がおぼつかないのかもしれないということである。そもそも個々の事象の抜き出しはボアズが諫め、人類学は包括的な民族誌の作成に向かったわけだが、紙幅に限りある教科書でそれは難しいことだ。ただ、事例をもって伝えたいことがよく分かった章もあった（例えばL6）。明らかなのは、読む側だけでなく、書く側の想像力も常に問われているということだろう。

この事例の難しさについてさらに学生と議論してみると、「なぜその国の、その人々なのか」が今ひとつ分からないことが根底にあるようだった。やはり同じような疑問は私自身も学生のころから強く抱いており、最近ではこれを「なぜヌアーか問題」と呼ぶことにしている。人類学の授業で教師がヌアーの事例を通して意図しているのは、結婚がロマンチッククラブに基づくヘテロセクシュアルの一夫一婦制であるという、学生のいわば常識を相対化することだろう。それは分かる。しかし、そのことを言うのになぜヌアーを持ち出さなくてはならないのか。同じようなこと、あるいは事実上それに相当することならば現在の日本にもたくさんあるはずなのに、だ。にもかかわらず、地理的にも存在論的にも遠く隔たった（と私には思われる）ヌアーについて、なぜあなたは話し、私は学ばねばならないのか。もちろん研究者の関心の持ちようは自由だから、ヌアーはだめだということではないが、だからこそ、語るあなたと学ぶ私にとってそれがヌアーであらねばならない必然性を知りたい。私自身は、こうしたいかにも分かりやすい他者を用いて「テーブルをひっくり返し、爆竹をしかける」[ギアツ 2007: 82] 人類学の手つきに共感できず、自分にとってより関係が深く切実な対象であった（と思われた）中国と東アジアをフィールドに選び、そしてかなりの月日が経った後に、上に幾度か言及している東アジアを対象地域とした人類学の教科書を編纂し授業で学生との議論に使用するに至っている。

もちろん、人類学は卑近な対象を扱った方がよいと言いたいのではないし、様々な地域や民族についての知見を学ぶ重要性も否定しない。そうではなくて、教師自身がそれを語るに至った筋道と、他にもないそのことを学生に学んでもらいたい理由が言明されるという手続きを踏めばなおさら、学生にとっても、そして教師の側にとってもより創発的な人類学の学びが駆動されるのではないかということである。しかも、私たちは今や「遠い国の他者」と日常的にも隣り合って暮らしているし、改めて言うまでもないことだが、差異は異国との間のみ見いだせるわけではない。人類学者は、われわれの知を豊かにするというそれ自体すばらしい理由にとどまらない、あなたが〇〇人について語り、学生がそれを学ばねばならない理由をも語る時に来ていると思う。もちろんこれは本書にとどまらず、私も含めた、人類学にたずさわる人たちが考え、それを開示してゆくべき主題であろう。

本書への以上のような評価と批判は、授業における学生とのやり取りをもとに、私が思考し口にしたことに基づいている。もちろんそれは初めから上のようにまとまったかたちであったのではなく、数回に及ぶ授業の中で学生の声聞き、それをもとに表現や切り口は変えつつ私が話すことで徐々に形作られてきたものだ。肯定的にせよ批判的にせよ、テキストとした本書を読み解く過程で私が自らの経験も織り交ぜつつ話を展開してゆく時、学生はいつにも増して熱心に聞き思考しているようであり、その後には数多くの意見が出されたように思う。本書はいわば触媒となり、私と学生双方の学びに資するところが大きかった。構成と内容は上述の通り入念に練り上げられたものだ。教養の授業にとどまらず、専攻学生との演習やディスカッションにも効果を発揮する。蓋し、よい教科書である。

## 参考文献

ギアツ、クリフォード

2007 『現代社会を照らす光——人類学的な省察』  
鏡味治也、小林伸浩、西本陽一訳、青木書店。  
上水流 久彦、太田 心平、尾崎 孝宏、川口 幸大  
(編)

2017 『東アジアで学ぶ文化人類学』昭和堂。

川口 幸大

2017 『ようこそ文化人類学へ——異文化をフィールドワークする君たちに』昭和堂。

桑山 敬己、綾部 真雄(編)

2018 『詳論文化人類学——基本と最新のトピックを深く学ぶ』ミネルヴァ書房。

奥野 克己、花淵 馨也(編)

2005 『文化人類学のレッスン——フィールドからの出発』学陽書房。

2011 『文化人類学のレッスン——フィールドからの出発 [増補版]』学陽書房。

古谷嘉章、関雄二、佐々木重洋編  
『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』

東京、同成社、2017年  
250頁、5,000円 (+税)

近藤 宏\*

「物質性の議論はいまだ行き着く先を知らない。本書に収められた論考すべてに目を通し終えて感じた率直な感想である」(p.237)。これは本書の編者の一人が、エピローグに記した一節である。本書は、共同研究(国立民族学博物館「物質性の人類学」2011年~2014年)の成果として編まれている。それに先立ち、編者の一人である古谷嘉章は、本書を予告する題の論文を発表している[古谷 2010]。本書の成立には、彼からの呼びかけがあったのだろう。呼びかけられた一人の関雄二はエピローグで、先の論文を読んだ時に「異様な興奮を感じた」とささげ返すが、演奏を導く指揮者のいない「ジャムセッションのような応酬」のプロセスから生まれた各論文は「さまざまところで呼応し合っている」(p.28)、と古谷はプロローグで書いている。

そのような共同研究の狙いのひとつに、「人類学の地平を拓げる」(p.27)ことがあげられている。古谷と関に佐々木重洋を加えた三人の編者のほか、二人の考古学者(溝口孝司、松本直子)、一人の美術史家(秋山聰)、二人の文化人類学者(鏡味治也、出口顕)が論を寄せる本書の各章は、いずれもが物質性を論点にする一方で、専門分野や対象、主題は多岐にわたる。またそれらの論述は、理論的かつ分野横断的なもの、具体的なモノや事象を深く掘り下げるもの、研究者自身の思考を深化させるものなど、多様に展開する。こうした議論の展開の仕方各論の「呼応」から示されるのは、「物質性」を起点にすることでいかに多方向的に議論が展開できるのか、ということではないか。その点から本書を紹介するにあたり、まずは、物質性からどのような考察が導かれているかに焦点を絞り、各章

の内容に目を向けたい。

溝口による第二章では、物質がいかに考古学的資料性を帯びるかについて、ルーマンのコミュニケーション論から、再帰的考察が展開される。そこでは考古学的なタイムスパンで残存し、一定の範囲でパターン化されているコミュニケーションの様式を「マーキング」する物質を資料に、「マーキング」形式の変化から社会やその変動を論じる枠組として、考古学が位置づけられる。出口による第七章は、住居論を検討する。そこでは、ある理念に基づく制作物として住居を考えることよりも、生きるなかで環境を整える過程に住居があると考えすることに価値を置くインゴルドの考え方が批判される。後者の考え方は動物の巣から人間の住居にも共通する、と指摘する文章でインゴルドが参照するハイデガーの住居論に立ち戻ると、人間と動物の連続性は指定不可能だという批判を通して、哲学領域との対話がなされる。古谷による第八章では、芸術批評が組み込まれている。カナダの現代アーティスト、ブライアン・ユンゲンの作品分析から始まる議論では、ヤノマミのシャーマン、ダヴィ・コペナワの視覚論を含むアマゾン地域における視覚性も考察される。これらの章は、物質性に備わる議論の広がりを生む力を分野横断的な論述によって示している。

これらの章とは方向性が異なるのが、鏡味による第五章、秋山による第四章、松本による第三章だろう。第五章の舞台は、バリ島である。インドネシア国家公認宗教であるヒンドゥー教の「教科書」にある五大元素論から人間身体形成を考察するために、いくつもの通過儀礼がその元素論に即した物質性の観点から検討される。人間身体が家屋の建造のための基本的「寸法」を提供するのだが、その「寸法」は生命の観念そのものでもある。ここでは、人間の身体と家屋という対象が重ねられ、物質性が生命という主題にも結びつくことが描かれる。この章が論じる物質としての人間身体を反転させた人としての物質が、第四章で論じられる。中世キリスト教圏における聖人像(磔刑像、女子修道院での幼子イエスの像など)には生動性があるといわれ、相互作用の機会を人に与える。それ自体が聖人に等しい聖遺物を収納する像を用いる昇天儀礼は、「本人による再現」を見る機会を経験可能にする。聖人としての像を通して、制作物の物質性が開く経験の豊かさが描かれている。第三章の主題は縄文土器の文様である。弥生土器の文様との比較によって浮かび上がる様式の差異から、文様の物質性が論じられる。そしてその物質性が与える印象を手掛かりに、二つの時期の生命観の差異が叙述される。これらの章は、ある事物の考察を深め、生命も含む多様な観念の考察を導

\*立命館大学 email: condohi@gmail.com